

SALAD BOWL

Vol. 11

～Fresh material sent direct from the real medical scene～

東葛病院・代々木病院から 医師を目指すあなたへ

医師を目指すみなさん、こんにちは！代々木病院の医学生室の服部です(^o^)/ 今回のサラダボウルは、あびこ診療所の星野啓一先生に「家庭医」という分野での楽しさについて、お話をいただきました。

【家庭医】とは、患者の年齢・性別・疾患などにかかわらず、地域住民の健康を支える医師。患者や患者の家族と密接な連携を保つことで、予防・治療・リハビリなどを行う。状況に応じて専門医を紹介するのも重要な役割とされる。

デジタル大辞泉より

「家庭医のたのしさ」

「君はおばあちゃんやお母さんと同じおなかのこわし方をするなー」

高校生のお嬢さんに投げかけた一言です。この方のおじいさんは私が訪問診療をしていて、最期はご自宅で看取りました。おばあさんは定期通院され、お母さんもたまに調子が悪いと来院されるご家族です。ご自宅の様子もわかり、ご家族の関係性（嫁姑問題や進学の悩みなど）もお聞きしています。

私は、病院の専門医としてキャリアを積んでいましたが、ひょんなことから、新宿の診療所に異動になり、そこで、「家庭医」の考え方を知り、家庭医を専攻とする後期研修医の指導にも携わるようになりました。わたしも最初から家庭医を目指したわけではなく、医師10年目くらいまでは病院診療が面白くてたまりませんでした。

医学教育学によれば医学生の特長として、研修医のころは「できるできない」が分かりやすい勉強をやりたがりです。つまり、「手技」に俄然興味を持ちます。難しい処置ができるようになった、困難な現場で救命できたなど、それは体力・気力が充実していた時期だからできることでもあります。

その次になると、「痛い思い」をします。自信が出て来て、自分を過信し、見落としや失敗をする経験です。当然ですが、指導医は研修医の「痛い思い」が患者さんの直接の害にならないよう、細心の注意を払います。

さらに世代が進むと、大抵の手技もできるようになり、難しい診断もそれなりにできるようになったり、クレームなどにも対処できるようになります。その時、私は、それでも、「治せない人」「関わり切れない人」がいる事に気づくようになりました。

そして、病院にいても治せない患者さんを再び診療所をお願いしたり、診療の合間に患者さんの人生経験をお聞きするにつけ、患者さんの「生きざま」が自分には最も興味のある部分なのかもしれないと感じるようになりました。（それまでは、そうしたことは医師の仕事ではないと思っていた部分もあります）

家庭医は「いつもそこにおいて、関わり続ける」存在です。患者さんが、体の不調「以外」の話をしてくれることにある意味喜びを感じる役目となります。（たいてい、混雑した外来に限って、大変ややこしいことが話題になる事が多く、医師のメンタルも試されます）



あびこ診療所所長
星野 啓一先生



おおくほ戸山診療所（新宿区）

それでは、寄り添っていればそれで済む仕事でしょうか？それなら素人の傾聴と変わりません。医師という役目を担っている以上、訴えの中に「病氣」が隠れていないかを探し出すのは「最低限」の役目です。それでも、家庭医の現場では慢性疾患¹管理が主体であり、ほとんどの患者さんは、「日常生活で変わったことが起きていないか？」を確認する役目となります。

反対に、病院診療は「治療」が主体のため、はやく診断がつき、効率のいい治療、最新の知識が求められます。このため、(他の医師とカンファレンスの習慣のある)病院の診療をつづけていけば藪医者になることは構造的に少ないと言われていました。有名病院で臨床をし、論文を書き続ける先生は皆優秀な先生でしょう。また、家庭医から見れば、病院はそうした診療をしてもらわなければ困ります。

家庭医・診療所診療は、単独診療²であることが多く、勉強をしなければあっという間に「藪」の仲間入りです。また、関わる疾患も臓器別ではないので、幅広い疾病が対象です(皮膚、耳鼻科疾患もよく相談されます)、子供からお年寄りまで、また、精神や身体の障害を持った成人や小児も受診されることがあります。

そのすべてを「完璧に」診ることはどんなスーパードクターでも無理でしょう。ですが、知識の欠損を自覚し、専門外の患者さんが来れば勉強のチャンスと思って、断らずに関わり続ける。一日一個、何か新しいことを知るようにすれば、年単位では大きな診療・診断力の差になります。(「プロ」であれば、どの領域どの職種でもじつは同じようなことをやっています。)家庭医が「簡単にやればこんな楽な現場はないが、一生懸命にやればこんなきつい現場はない」と言われるゆえんです。

はたして、みなさんは「家庭医」にやりがいを感じていただけるでしょうか？
個人的には、こんな魅力的な現場って、「医療職」の中でもそうそうないよなあと思いつつ、毎日診療にあたっています。私が実際に現場で受け、とても印象に残っている言葉をご紹介します。この言葉やシーンに魅力を感じていただける方は、是非一緒に働きたいですね。



現在、星野先生が所長を務めている
あびこ診療所（千葉県我孫子市）

「先生、明日私の結婚式なんだけど風邪ひいちゃった、治して！」

人生の一番大事な日の一番忙しいときだろうに、花嫁さんが来てくれました。

「先生が、『(病院じゃなくて)自宅なんだから添い寝をしてもいいんだよ』って言ってもらえたから、昨日添い寝したんです。私寝られなかったけど、本当に家で看取れてよかったです」

自宅でご主人の死亡確認をしたあと、奥さんから言われました。

「がんセンターじゃ、心配事なんて言える雰囲気じゃなくて・・・『病氣の主治医』は病院の先生にお願いしますけど、『私の主治医』は星野先生に引き続きお願いできますか？」

診断を大病院におねがいし、(残念ながら)癌の診断がつかしましたが、いろいろ不安で外来で言っていただけ一言。

「先生が、『がんばって勉強してなる価値のある仕事だよ』とおっしゃってくださったことに、どんなに、励まされたことか。私の受験生活1年半は、先生のこの言葉と共にありました。今は、まだ、医師への道のほんのスタートラインに立てただけですが、星野先生のような医師になるために、これから、一生懸命がんばりたいとおもいます。」

社会人を経て、医学部に合格した「患者さん」から頂いたお手紙です。私がとても大事にしている手紙ですが、皆さんと共有します。私の文章から家庭医の楽しさが伝わることを祈ります。皆さん、どうか頑張ってくださいね。

¹慢性疾患とは、徐々に発病し、治癒にも長期間を要する疾患の総称。心臓病・関節リウマチ・結核・糖尿病などの類。慢性病。大辞林第3版より

²文中の単独診療とは、医師一人体制で診療所の診療を行っていることを言います。